

喉頭転移をきたした腎細胞癌の1例

独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）仙台病院泌尿器科

米谷 重俊 並木 俊一 工藤 貴志
山下 慎一 相沢 正孝 庵谷 尚正

要旨：

症例は55歳男性。2010年8月、肉眼的血尿を認め当院紹介受診。右腎腫瘍（cT2aN0M0 Stage II）の診断にて2010年11月に根治的右腎摘出術及び大動静脈間リンパ節郭清を施行した。病理診断はclear cell carcinoma, G2>G3, v(+), pT2N0であった。術後、再発なく経過していた。2014年4月より咽頭違和感を訴え5月に当院耳鼻科を受診し喉頭鏡にて喉頭披裂間部に5mm程の腫瘍性病変を認めた。明らかな周囲への浸潤やその他の転移は認められなかった。2014年5月に経口腔の喉頭腫瘍摘出術を施行した。病理診断は腎細胞癌の転移であった。その後、再発所見なく外来通院中である。

腎細胞癌は血流に富み、血行性に肺、リンパ節、骨、肝への転移が多いことが知られているが、喉頭への転移を認めた症例は非常に稀である。また腎細胞癌は初回治療から比較的長時間経過した後でも再発転移する可能性が知られており、腎細胞癌の既往がある症例においては腎細胞癌による転移を念頭に置く必要がある。

（日泌尿会誌 109(3)：137～139, 2018）

キーワード：腎細胞癌、喉頭転移

緒 言

腎細胞癌は血流に富み、血行性に肺、リンパ節、骨、肝への転移が多いことが知られている。また腎細胞癌の頭頸部への転移は約4%から約10%に昇る¹⁾が、腎細胞癌術後に初発で喉頭転移をきたす症例は非常に稀な症例である。今回我々は腎摘後、3年5カ月経過した後に初発で喉頭転移をきたした症例を経験したので文献的考察を加え報告する。

症 例

患者：55歳、男性。

主訴：喉頭違和感。

既往歴：特記すべき事項なし。

現病歴：2010年8月、肉眼的血尿を認め当院紹介受診した。右腎腫瘍（cT2aN0M0 Stage 2）の診断にて2010年11月に根治的右腎摘出術及び大動静脈間リンパ節郭清を施行した。病理診断はclear cell carcinoma, G2>G3, v1, pT2N0であった。予後因子として静脈浸潤を認めたため術後インターフェロン（IFN）療法を施行した。2014年4月より咽頭違和感を訴え5月に当院耳鼻科を受診した。

入院時現症：身長165.1cm、体重69.0kg、体温36.2℃、

血圧130/79mmHg、脈拍70/分。

血液検査所見：特記すべき所見なし。

画像診断：喉頭鏡にて観察したところ喉頭披裂間部に5mm程の腫瘍性病変を認めた（Fig. 1-A, B）。頸部MRIでは同部位にT2強調画像にて高信号を示す5mm程の腫瘍を認めた（Fig. 1-C, D）。明らかな周囲への浸潤やその他の転移は認められなかった。

病理所見：HE染色に加え、免疫染色ではCAM5.2, PAS染色が陽性であった。また喉頭癌原発の淡明細胞癌の可能性も考えられたがCD10陽性より腎細胞癌の転移と診断された（Fig. 1-E, F, G）。

治療経過：2014年5月に経口腔の喉頭腫瘍摘出術を施行した。術後、8カ月経過しているが再発所見なく外来通院中である。

考 察

喉頭腫瘍の多くは原発性であり転移性喉頭腫瘍は0.09%から0.4%程と報告されている。その中でも喉頭転移をきたす癌で最も多いのは悪性黒色腫が37%、次いで腎細胞癌からの転移が13%である²⁾。その他には乳癌、前立腺癌からの転移も認められる。また喉頭への転移部位では本症例のように声門上が38.2%と最も多く、半喉頭以上に及ぶのが35.5%、声門下が18.4%、声門が5.3%喉

受付日：2017年8月4日、受理日：2017年11月24日

米谷重俊：独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）仙台病院泌尿器科〔〒981-8501 宮城県仙台市青葉区堤町3-16-1〕

E-mail: maiyamy7@yahoo.co.jp

© 2018 The Japanese Urological Association

Fig. 1 喉頭鏡 (A, B) MRI (C, D) 病理所見 (E, F, G)

A, B: 喉頭鏡にて喉頭披裂間部に5mm程の腫瘍性病変を認めた.

C, D: MRIでは喉頭にT2強調画像で高信号を示す5mm程の腫瘍を認めた. 明らかな周囲への浸潤やその他の転移は認められなかった.

E, F: HE染色では喉頭上皮下に著明な淡明細胞の浸潤を認めた. (E: HE stain×10, F: HE stain×40)

G: 免疫染色ではCD10が陽性であった.

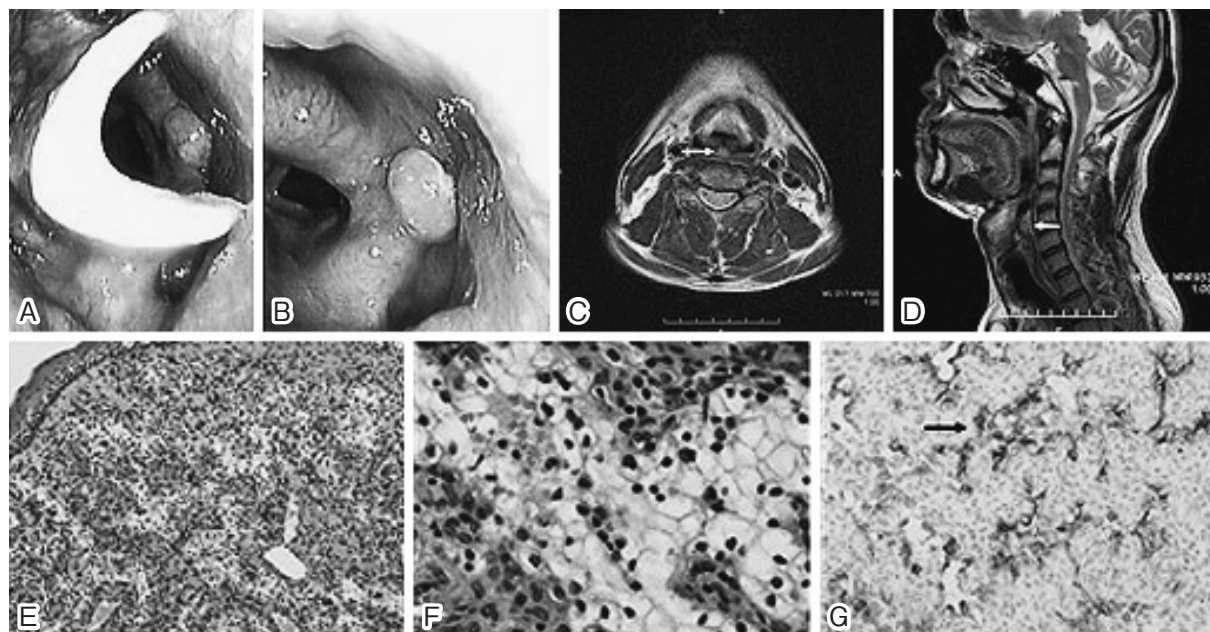


Table 1 初発で喉頭転移をきたした腎細胞癌の報告例と本症例の検討

報告者	年齢	性別	症状	再発までの期間	部位	腫瘍径	治療	転帰
勝部ら ⁶⁾	79	M	嗄声	6年	声門	3mm	摘出	肺転移
Simpsonら ⁷⁾	48	M	嗄声	7年	声門上	12mm	摘出	不明
Demirら ⁸⁾	60	M	嗄声 呼吸困難	5年	半喉頭	57mm	放射線療法	不明
Ferlitoら ⁹⁾	73	M	嗄声	不明	声門下	10mm	摘出	骨転移
本症例	55	M	喉頭違和感	3年5カ月	声門上	5mm	摘出	再発なし

頭外側は2.6%となっている³⁾. 声門上では本症例同様に違和感や異物感といった症状を多く認める. 声門では嗄声を認め声門下や喉頭外側は基本的に無症状であるが進展に伴い嗄声や違和感といった症状をきたす⁴⁾. 腎細胞癌の頭頸部への転移の中で初発の頭頸部への転移は1%程度と報告されている⁵⁾. さらに本症例のように初発で喉頭転移をきたした症例は極めてまれであり過去に4例報告されているのみであった (Table 1). Ferlitoらの症例に関しては喉頭腫瘍を指摘され右腎細胞癌を認めた. 喉頭腫瘍切除したところ, 右腎細胞癌による転移と診断された. 本症例を含め5症例全てが男性のみの症例であったがその原因ははっきりしなかった. また5例のうち4例が3年以上経過した後に転移をきたしており, 手術にて摘出可能であれば腫瘍摘出を施行した^{6)~9)}. 病理所見は, 喉頭腫瘍原発のほとんどが扁平上皮癌であり腺癌は0.2%ほどに認める⁴⁾. 喉頭腫瘍原発の淡明細胞癌は過去に9例報告されている. 腎細胞癌の淡明細胞癌との鑑別

では腎細胞癌の既往や病理のHE染色と共にCD10が有用である. CD10は細胞膜表面のメタロペプチターゼでありリンパ球前駆細胞や未熟なB細胞の一部に発現するが腎糸球体や尿細管上皮細胞にも発現を認めており, 原発の淡明細胞癌では染色されない¹⁰⁾. 本症例では, HE染色にて淡明細胞の著明な浸潤を認め, 免疫染色にてCD10, CAM5.2, PASS染色が陽性であったことから腎細胞癌の喉頭転移の診断に至った. 腎癌の転移の多くは血行性転移であり頭頸部領域単独の転移は, 肺循環を介さない椎骨静脈叢から翼突静脈叢, 海面静脈叢を経由する経路とされている¹¹⁾. 今回の症例も肺転移を認めてないことから椎骨静脈叢を経路とする血行性転移と考えられる. 予後に関しては腎細胞癌による転移巣が単発で完全切除されれば良好とされるが, 腎摘除術後2年以内の転移出現であれば予後不良とされる¹²⁾. 今回の症例を含めた5症例とも2年以上経過してからの転移だが, 少なくとも2症例では他の転移をきたしており, 予後が良いと

は言えない。症例数が少なく経過観察期間も短いため更なる経過観察が必要である。

腎癌患者の予後には原発腫瘍の浸潤度、細胞異型度、静脈浸潤の有無、リンパ節転移の有無などの病理学的因子が重要である¹³⁾。本症例では病理所見で静脈浸潤を認めた。IFN療法による再発予防・生存率向上は認められてはいない¹⁴⁾ものの、副作用を考慮し3カ月間のIFN療法を施行した。腎細胞癌の喉頭転移は比較的長期経過した後に認めており、腎細胞癌を既往に持つ症例においては腎細胞癌による転移を念頭に置く必要があると思われる。

文 献

- 1) 里見佳昭, 松浦謙一, 小川 英, 森 豊: 腎癌の耳鼻咽喉科領域(耳下腺, 鼻腔, 舌, 歯肉)への転移症例. 臨泌, **28**, 611—616, 1974.
- 2) Nicolali P, Puxeddu R, Cappiello J, Peretti G, Battocchio S, Facchetti F and Antonelli AR: Metastatic neoplasms to the larynx: report of Three cases. Laryngoscope, **106**(7), 851—855, 1996.
- 3) Ferlito A, Caruso G and Recher G: Secondary Laryngeal Tumors. Arch Otolaryngol Head Neck Surg, **114**(6), 635—639, 1988.
- 4) 佐藤武男: 喉頭癌患者の取り扱い. 耳鼻臨床, **80**, 697—710, 1987.
- 5) Hessian H, Strauss M and Sharkey FE: Urogenital tract carcinoma metastatic to the head and neck. Laryngoscope, **83**, 1352—1356, 1986.
- 6) 勝部泰彰, 塚原清彰, 中村一博, 稲垣太郎, 清水雅明, 豊村文将, 吉田知之: 腎細胞癌頭頸部転移症例の治療経験. 日耳鼻, **115**, 917—920, 2012.
- 7) Dee SL, Eshghi M and Otto CS: Laryngeal Metastasis 7years After Radical Nephrectomy. Arch Pathol Lab Med, **124**(12), 1833—1834, 2000.
- 8) Demir L, Erten C, Somali I, Can A, Dirican A, Bayoglu V, Kucukzeybek Y, Altinboga AA, Ermete M, Oztup RM and Tarhan MO: Metastases of renal cell carcinoma to the larynx and thyroid: two case reports on metastasis developing years after nephrectomy. Can Urol Assoc J, **6**(5), E209—E212, 2012.
- 9) Ferlito A, Pesavento G, Meli S, Recher G and Visona A: Metastasis to the larynx revealing a renal cell carcinoma. J Laryngol Otol, **101**(8), 843—850, 1987.
- 10) Testa D, Galli V, Rosa GD, Iovine R, Staibano S, Somma P, Mignogna C and Iengo M: Clinical and prognostic aspects of laryngeal clear cell carcinoma. J Laryngol Otol, **119**(12), 991—994, 2005.
- 11) Nahum AM and Bailey BJ: Malignant tumors metastatic to the paranasal sinuses. Laryngoscope, **73**, 942—953, 1963.
- 12) Leibovich BC, Cheville JC, Lohse CM, Zincke H, Frank I, Kwon ED, Merchan JR and Blute ML: A scoring algorithm to predict survival for patients with metastatic clear cell renal cell carcinoma: a stratification tool for prospective clinical trials. J Urol, **174**(5), 1759—1763, 2005.
- 13) 佐藤 健, 河合弘二, 岩崎明郎, 石川博道, 小磯謙吉, 菅間 博, 小形岳三郎: 腎細胞癌の予後決定因子としての病理学的事項. 日泌尿会誌, **72**, 282—289, 1991.
- 14) 三木恒治, 水谷陽一: 腎細胞癌の免疫療法, 分子標的療法. 外科治療, **98**, 709—716, 2011.

ISOLATED METASTASIS OF RENAL CELL CARCINOMA TO THE LARYNX: A CASE REPORT

Shigetoshi Maiya, Shunichi Namiki, Takashi Kudo, Shinichi Yamashita, Masataka Aizawa and Naomasa Ioritani

The Department of Urology, Japan Community Health Care Organization Sendai Hospital

Abstract:

A 55-year-old man underwent right radical nephrectomy after the diagnosis of right renal cell carcinoma (RCC). He did not show any relapse or metastasis for 3 years and 5 months after surgery. He was admitted to the hospital in April 2014 with a throat discomfort. Laryngoscopy revealed a 5 mm supraglottic mass. The tumor was locally excised and pathology revealed metastatic RCC. While RCC frequently metastasizes to the lungs, bones, lymph nodes, and brain, an isolated metastasis of RCC to the larynx is an extremely rare event. We report a case of isolated RCC metastasis to the supraglottic larynx 3 years and 5 months after radical nephrectomy.

(Jpn. J. Urol 109(3): 137-139, 2018)

Keywords: renal cell carcinoma, laryngeal metastasis

Received: August 4, 2017, Accepted: November 24, 2017

© 2018 The Japanese Urological Association